

研究ノート：「北田秋圃」をさがして (3)
 ～ *Little Women* の初邦訳『小婦人』の翻訳者をさがす旅～
**A Tireless Search for ‘KITADA Akiho (Shuho)’ (3):
 Who Is the First Translator of *Little Women*?**

小松原 宏子

Hiroko Komatsubara

要旨: ルイザ・メイ・オルコット作『若草物語』は今もなお世界中で多くの読者に愛されている名作である。原題を *Little Women* というこの小説は、日本では明治 39 年 (1906 年) に北田秋圃という翻訳者の手によって、彩雲閣という出版社から『小婦人』というタイトルで初邦訳された。しかし、この「北田秋圃」が何者であったのか、どのようないきさつで *Little Women* を翻訳することになったのか——その正体は謎に包まれている。筆者は、たったひとつの情報である 1994 年の新聞記事を手掛かりに、代議士・高橋本吉夫人であったと言われる「北田秋圃」という翻訳者・高橋なをを追いかけてみることにした。これは 2022 年に発表した研究ノート「北田秋圃をさがして」および 2023 年「北田秋圃をさがして (2)」の続編である。今回は、高橋なをを取り巻く人々と、『小婦人』の出版社である彩雲閣についてももう少し詳しく調べてみた。

キーワード: 高橋なを、若草物語、小婦人、北田秋圃、彩雲閣、岡麓 (岡三郎)

Abstract: One of the great pieces of American literature from the 19th century, *Little Women*, authored by Louisa May Alcott, was first translated into Japanese in 1906 under the pen name Kitada Akiho. The title she chose was *Sho Fujin*, which means ‘little women,’ published by Saiunkaku. Kitada Akiho never published other works, and no one seems to know much about her. I began this research after reading a short newspaper article published in Yomiuri Shimbun on July 6th, 1994. Her real name was Takahashi Nao, the wife of a politician, Takahashi Motokichi. This essay is a sequel to my 2022 & 2023 research notes that introduced Nao’s daughter, Matsumura Tane. This time, I researched further into the people who surrounded her and the publisher, Saiunkaku.

Keywords: Takahashi Nao, *Little Women*, Sho-Fujin, Kitada Akiho (or Kitada Shuho), Saiunkaku, Oka Fumoto (Oka Saburo)

はじめに

北田秋圃は、現在日本では『若草物語』として知られている *Little Women* を、日本で最初に翻訳した人物である。

1906 年に *Little Women* を『小婦人』というタイトルで訳したこの翻訳者の名まえは、日

1. 北田秋圃周辺の人々

1.1 饗庭篁村

高橋なをが翻訳者・北田秋圃として *Little Women* を翻訳するに至る経緯で最重要人物となるのが饗庭篁村（1855-1922）である。

筆者をはじめ、なをの夫であった代議士・高橋本吉（1873 - 1920）から北田秋圃を追ったため、本吉との関係などから、『小婦人』の序文を書いた坪内逍遙がキーマンであったのではないかと推測していた。しかし、前著（小松原 2022）に記したとおり、逍遙と本吉のあいだに早稲田における先輩後輩以上の強い関係は感じられず、ましてやなをは、その妻であるというだけで逍遙と結びつきがあると考えるのは無理がある。

そして、その後の調査および、高橋なをの嫡孫・高橋治氏とコンタクトが取れたことにより、逍遙よりも篁村の存在がクローズアップされてきたのである。

高橋治氏への取材により、昨年度の紀要では、なをの母が篁村の妹であったと記述した。この「母」・隆子は、なをの父・高橋昌長の後妻であるとされていた。つまり、はじめは、隆子はなをの継母であり、その兄が篁村であったと考えられたのである。

「隆子」は昌長の後妻である、と、なをの長女・雪子の覚書に記されている。また、なをの戸籍によると生みの母は「里宇」である。

しかし、この里宇と隆子の生年は同じ嘉永5年8月であり、旧姓も同じ「梅津」である。のちの治氏の調べにより、没年も同じ昭和10年ということで、隆子は「たかこ」でなく「りゅうこ」と読ませるのであり、里宇（りう）と同一人物であるらしいことがわかった。さらに混乱をまねくことに、里宇＝隆子は、実際に昌長の後妻なのである。先妻は阿銀という名であったが早世したと見られる。

この里宇（＝隆子）の妹が饗庭篁村に嫁いだのである。つまり、高橋なをのほんとうの叔母の連れ合いが篁村である。

よって、文学界の大御所・坪内逍遙が北田秋圃訳の作品に序文を書いたのも、なを－高橋本吉－逍遙というルートではなく、なを－篁村－逍遙のルートだったと考えるほうが自然である。

『小婦人』の序文の筆者として坪内逍遙の名が挙げられることが多いが、実際の序文は篁村のほうが本格的である。逍遙の文章は序文と言うよりも手紙に近く、翻訳者・秋圃に寄せる言葉という色合いが濃い（2023 小松原）。

饗庭篁村と高橋本吉・なを夫妻の墓は染井墓地の隣同士に位置している。非常に親密な親戚づきあいをしていたことは想像にかたくない。

1.2 高橋本吉

高橋なをの夫である高橋本吉は、北秋田出身の代議士である。

同じ高橋同士の結婚であったため、親族同士の結婚であるという記述もある（杉渕廣『秋田代議士物語』）が、高橋治氏の証言や『高橋本吉君追悼集』からも、その事実はないと判断される。また、坪内逍遙の媒酌で結婚したという記述も、おそらくは誤認である。もし事実であれば、追悼集その他にもその記述が残るであろうからである。また、追悼集の筆者の中にも逍遙の名はない。

本吉となをの結婚の経緯はわからないが、番町教会（現在の富士見町教会）で出会ったのではないかと考えられる。

本吉が番町教会に足を踏み入れるようになったきっかけは、たまたま前を通りかかって、行われていた葬儀の厳粛なことに感銘を受けたからである、という本人の述懐を友人が記録している（『高橋本吉君追悼集』P.178-179）。

一方、なをは、後述の安川亨の影響で、本吉より先に洗礼を受けていたと思われるが、それが植村正久の番町教会であった可能性がきわめて高い。

さらに、昨年度の紀要にも記したように、高橋本吉となをの結婚について、心配した植村が、本吉の人となりについて逍遙にたずねたという記録もある（『高橋本吉君追想録』P.344）。親同士が決めた結婚であれば、そのような問い合わせはしないであろう。

いずれにしても、本吉もなをも熱心なキリスト教の信者であった。このことが、なをの *Little Women* の翻訳につながった可能性は捨てきれない（小松原 2023）。

1.3 高橋石斎

高橋石斎（1817-1872）は、著名な書家である。高橋なをの父・高橋昌長はこの石斎の長男である。つまり、高橋なをは石斎の孫にあたる。

「幕末明治の書家で、名は豊珪、字（あざな）は子玉、石斎は号です。尾張名古屋藩の撃剣師範でしたが、江戸にでて書家として名をあげました」と、飯田市のホームページにあるので、出身は長野県であるらしい。

高橋なをには絵心があり、『小婦人』の挿絵も描いている。絵筆を扱う巧みさは、書家である祖父の血を引いているからかもしれない。

1.4 高橋健三

高橋健三（1855-1898）は、高橋石斎の三男であり、明治期のジャーナリストで、中央大学の前身である英吉利法律学校創立者の一人である。高橋なをの叔父にあたる。

坪内逍遙はじめ、文人との交友関係も幅広かった。なをの翻訳家デビューに影響を与えた可能性も考えられる。

1.5 植村正久

植村正久（1858 – 1925）は、内村鑑三と並ぶ日本のプロテスタント信仰の草分けである。

高橋本吉・なを夫妻が長老職（役員）をつとめていた番町教会（のちの富士見町教会）の創始者である。本吉の葬儀では牧師として司式をおこなった。

筆者は、『小婦人』というタイトルは、若松賤子（1864–1896）訳の『小公子』に続くものとして冠されたものではないかという推測をしているが（小松原 2022）、植村正久の妻・季野（すえの）はフェリス女学校（現・フェリス女学院）出身であり、若松賤子の親友であった。賤子亡きあと、植村季野が教会員である高橋なをを翻訳者として推挙した可能性もあるかもしれない。

1.6 安川亨

安川亨（生年不詳 -1908）は、明治時代の長老派教会、日本基督一致教会の牧師である。もとは安左エ門という名であり、のちに亨と改名した。

高橋なをの長女・雪子の覚書には、安川亨は日本の初代プロテスタント牧師であるという記述がある。また、そのことにより実の親から勘当されたともある。

亨ははじめ高橋石斎の長女（氏名不詳）と結婚したが、死別したのち、その妹である石斎の三女・やすを妻としてめとった。

高橋治氏によると、なをはこの叔母やすと非常に仲がよく、その影響を受けてキリスト者になったということである。植村正久も一致教会の牧師であった。そのため、なをは夫・本吉より先に番町教会の教会員になっていたと考えられる。

このように、高橋なをを取り巻く人々は、錚々たる文人あるいは聖職者たちであった。

夫・本吉が、早世していなければ総理大臣になったであろう有能な政治家であったために、筆者ははじめ「その妻」という立ち位置でなをを見ていたが、こうして調査が進んでいくと、なを自身が環境と才能に恵まれていたことがわかる。

夫亡きあとも、再婚することなく四人の幼い子供を育て上げた気丈さは、『若草物語』のマーチ夫人や、作者ルイザ・メイ・オルコットとその母アビゲイルと共通するところがある。翻訳者としては『小婦人』一冊のみを残して表舞台から消えた高橋なをであるが、明治・大正・昭和の世を生き抜いた自立した女性としての人生の軌跡は、市井に生きた一市民としても、その時代の著名な数々の婦人活動家と並び称されるべきものであると言っていいであろう。

2. 彩雲閣について

2.1 岡麓（岡三郎）

岡麓（おか・ふもと）（1877-1951）は正岡子規の門下の歌人である。本名は三郎。この岡三郎が、『小婦人』を出版した彩雲閣の設立者である。

『小婦人』の奥付には、

著作者 北田秋圃
 東京市神田区表神保町二番地
 発行者 岡三郎
 東京市小石川区久堅町百八番地
 印刷者 吉見繁蔵
 東京市小石川区久堅町百八番地
 印刷所 博文館印刷所
 発行所 東京市神田区神保町貳番地 (電話本局一六一八 振替口座四一〇五)
 彩雲閣

とある。

彩雲閣は、明治39年(1906年)に創立されている。創立者の岡三郎は徳川幕府の奥医師の家系に生まれ、経済的に恵まれていたようであるが、人脈にも恵まれていたとみえ、この出版社には、多数の著名な明治の文化人たちが出入りしていた。

『小婦人』の中表紙には、

坪内逍遙序
 饗庭篁村序
 北田秋圃女史譯並畫

とある。この大物ふたりの名まえと並んで、「譯並畫」と記された「北田秋圃女史」のデビューがいかにか華々しいものであったかは想像にかたくない。しかも、本国アメリカではすでに高い評価を得てロングセラーとなっているルイザ・メイ・オルコットの *Little Women* の初邦訳である。それが弱冠29歳の青年によって立ち上げられた出版社の、初年度の出版であることは驚くべきことである。

訳者自身による「はしがき」の中にはこんな一文がある。

本書は米國の文壇に其名聲嘖々たる Miss Alcott の著書 *Little Women* を抄譯したるものなり。——(中略) 本來過分の業なれど、恩師の助力と切なる勸めとに任せ、かつは原著の版權所有者よりも懇なる同情を寄せられたれば——(後略)
 (『小婦人』彩雲閣「はしがき」)

「原著の版權所有者よりも懇なる同情を寄せられた」のは、いったいどういういきさつなのだろう。1868年に出版された *Little Women* は、この時点ではまだ版權が切れていない。他の出版社にさきがけて彩雲閣が版權を得たのは、多額の版權料を払ったものか、それとも何らかの形で米國の出版社に顔がきくような人物の働きかけがあったのだろうか。

「恩師の助力と切なる勸め」のくだりも気になる。「助力」だけでなく、秋圃、つまり高橋なをに「切なる勸め」をした人物がいることになる。「恩師」というからには、なをを指導する立場にあった者であろう。しかしこの「助力」は翻譯の手助けであろうか。「切なる

勧め」とあるからには、秋圃が望んだ翻訳というよりは、推挙され、説得されてこの大役を引き受けるに至ったプロセスが推測される。「助力」は、米国の版權を取るところから彩雲閣からの書籍出版までのお膳立てを示すものであるとも考えられる。いずれにしても、このあたりのいきさつは文学史上の謎であり、推測の域を出ない。

しかし、ともかく 29 歳の岡三郎は、彩雲閣という一国一城の主となり、坪内逍遙、饗庭篁村というビッグネームを引っ提げて『小婦人』を刊行する。1906 年の年の瀬もおしつまったころ新聞広告をうち、高橋なをはじめ翻訳にかかわったとされる三人の女性は年明けに正装して皇族御用達の丸木写真館にて記念撮影をするのである（2023 小松原）。

岡三郎は東京の生まれであり、東京府立尋常中学校（府立一中）（現・都立日比谷高校）を 15 歳で中退したあと、大八洲学校という私学に入学し、同時に宝田通文の私塾にて国文や和歌を学び、多田親愛からは書道を学んだ。また大八洲学校では佐々木道綱が講師をしていたので、和歌の添削も受けていた。

22 歳のころ、ふとしたきっかけで伊藤左千夫と知己を得、その後、ともに正岡子規に弟子入りした。子規の死後は、左千夫主宰の短歌雑誌「馬酔木」の編集同人になる。

のちに岡の彩雲閣から「北田秋圃」のペンネームで *Little Women* を翻訳出版する高橋なをもまた短歌をたしなんでいた。1899 年 11 月の『女学講義』付録 P36 には、なをの投稿とみられる歌が掲載されている。

○樹間紅葉 東京 高橋なを子

常盤木の中にまされるひともの紅葉は色のはえてみえけり

岡三郎と高橋なを、つまり岡麓と北田秋圃は、もしかしたら短歌を通してのつながりがあったかもしれない。

明治 39（1906）年、岡三郎は彩雲閣を創業し、「日本婦人」という雑誌を発行するかたわら、演劇活動の機関誌「趣味」の発売事務も行った。「趣味」の編集は西本波太（翠蔭）、発行は易風社であるが、母体である易風会（のちの文芸協会）の立ち上げには坪内逍遙が関わっている。

しかし、翌明治 40（1907）年 9 月、岡は早くも彩雲閣の経営に行き詰まり、幕府の御家人であった父親の財産を使い果たした挙句、家屋敷も人手に渡す結果となって、出版業から手を引き、「趣味」とも関係を絶ったとの記述がある（伊藤整『日本文壇史 12 自然主義の最盛期』P199）。ただし、明治 43（1910）年発行の『画行脚』（小林鐘吉）の奥付にも、彩雲閣と岡三郎の名が見られる。

いずれにしても、彩雲閣は立ち上げから廃業までが数年という短命で終わったことは確かである。が、そのわずか 4～5 年ほどのあいだに、岡は精力的に多くの出版物を刊行した。それらの著者としては『世界語』（エスペラント語の解説）の二葉亭四迷をはじめ、島村抱月、国木田独歩、森鷗外、正宗白鳥、坪内逍遙といった文学者が名を連ねている。

そのなかにあって、翻訳者「北田秋圃」は彗星のごとく現れ彗星のごとく消えるのだが、

この彩雲閣という出版社もまた文学史上に一瞬だけ現れ、あっけなく舞台を降りることになる。秋圃の翻訳出版が『小婦人』一冊のみで終わった理由は、もしかしたらこのあたりにあったのかもしれない。

2.2 西本翠蔭（西本波太）

西本翠蔭（1882-1917）は、本名を西本波太といい、明治～大正期に活躍した編集者・作家である。

岡麓（三郎）の彩雲閣立ち上げに加わり、主な編集実務を行う。岡三郎が経済的に破綻したあとは易風社にて雑誌「趣味」の編集・刊行を引き継いだ。前出の『日本文壇史 12』には、易風社は波太が営んでいた、とある（P199）。しかし、『日本文壇史』の10巻「進文学の群生期」には、彩雲閣も波太が経営との記述があり（P30）、信憑性にはやや問題がある。易風社は坪内逍遙らの演劇団体「易風会」を母体としていて、波太は編集人のひとりと考えるのが順当であろう。ただ、編集の中心人物であった可能性は高い。『日本文壇史』14巻「反自然主義の人たち」には次のような記述がある。

明治四十二年（1909年）の三月、北原白秋の詩集「邪宗門」が、文藝雑誌「趣味」の発行所なる易風社から出版された。「趣味」は「早稲田文学」の傍系に當る文藝雑誌であるが、「早稲田文学」が評論を中心とする傾向があったのに較べて、新人の小説を主として載せ、「新小説」のやうな純文藝雑誌の體裁をとつてゐた。「趣味」発行の業務を歌人の岡麓から引き継いだ翠蔭西本波太は、早稲田系の文士であるといふ立場を利用して、積極的に出版にも乗り出し、花袋、白鳥、泡鳴などの小説集や、森鷗外や二葉亭四迷の翻譯なども出版してゐた。（P77）

また、『日本文壇史』15巻「近代劇運動の發足」には、「雑誌「趣味」の主宰者西本波太」（P194）、「西本波太の易風社」（P201）という文言も出てくる。

波太は翠蔭の名で小説を書いてもいるが、最終的には編集者として名を残した。

帝国婦人協会出版部発行、彩雲閣発売、著作兼発行者西本波太の『小萩集』（明治39（1906年））において、波太は翠蔭の名で『有心無心』という小作品を書いている。

残念ながら波太は創作の才にはあまり恵まれていなかったとみえ、正直、よくわからない内容の短編である。舞台は日本なのかイギリスなのか、登場人物は日本人なのか外国人なのか、はたまた何が言いたいのかもはっきりしない。日本人らしき「瀬戸夫人」が、倫敦の貧しい子どものためにほどこしをしたがっているどこかの金髪の子どもたちにそのほどこしの金を出してやりてほしいと夫にたのむ、という、ただそれだけの内容である。

稚拙とっていいのか幻想的というべきなのかよくわからないが、興味深いのは物語の場面が教会の礼拝であり、その二重の「ほどこし」を思い立つきっかけというのが、牧師の説教なのである。

西本翠蔭（波太）はプロテスタントのクリスチャンだったのであろうか（カトリックであ

れば説教者は「神父」「司祭」などであるのが普通)。そうだとすると、熱心な長老派のキリスト教信者だった北田秋圃（高橋なを）とのつながりがここにあるかもしれないし、宗教色の強い *Little Women* の翻訳をなをに「切に勧め」たのは波太であったかもしれない。

ただし、高橋なをと西本波太の生年は一年しか違わないうえに、なをのほうが1歳年上である。波太を「恩師」と呼ぶのには無理があるかもしれない。

3. 今後の調査について

まったくの謎に包まれていた北田秋圃と彩雲閣だが、秋圃（高橋なを）の嫡孫・高橋治氏への取材や『日本文壇史』の記述などによって、うっすらと輪郭が見えてきた気がする。

しかし、まだまだ不明の部分も多い。特に、「三人の女性の合同ペンネーム」という読売新聞の記事と三人の女性が写った写真が存在するからには、やはり高橋なをを以外のあとの二人の人物つきとめたい。さらに、新婚の若い女性であった秋圃（なを）が、*Little Women* という大作を初邦訳するに至った経緯も知りたいものである。

『小婦人』として出版されたこの翻訳書は、のちに *Little Women* が『若草物語』として日本の読者に不動の人気を得るに至るにあたって重要な役割を果たしたと筆者は考えている。

日本で『若草物語』と言うとき、それは *Little Women* の Part1 のみを指す。つまり、四姉妹がプレゼントのないクリスマスを迎えようとするところから父マーチ氏が従軍先から帰還するまでの一年間の物語である。

たしかに、ルイザ・メイ・オルコットの *Little Women* も 1868 年にまずこの部分が発表され、好評を博したことにより翌年 Part2 として続編が出版される。しかし本国アメリカではこの 2 作品がセットで *Little Women* なのであり、前半はあくまで「第一部」の扱いである。

出版から 40 年を経た 1906 年、当然のことながら *Little Women* は Part1 だけであったはずがない。しかし彩雲閣と北田秋圃はあえてこの Part1 だけを翻訳出版した。

その後、日本ではこの前半だけが物語としてとらえられ、今に至る。これまでにのべ 100 人近い翻訳者によって 200 種類近い『若草物語』が出版されている（小松原 2021）が、そのほぼすべてが Part1 だけで完結している。Part2 は『若草物語』の続編としてあつかわれ、1 部と 2 部の合本はようやく 2019 年に谷口由美子氏の翻訳によって講談社から初めて出版された。しかしそれもタイトルは『若草物語 I & II』である。『若草物語』だけでは、Part2 までの完全版であることがわからないからであろう。

何人もの監督によって制作された *Little Women* 原作の映画でも Part2 までが描かれているにもかかわらず、日本では変わらず Part1 だけが愛されている理由についても今後さぐっていきたいと考えている。

もしかしたらその原点が初邦訳である北田秋圃の『小婦人』にあるかもしれないからである。

注

本文における『若草物語』は、*Little Women Part I*を指すものである。

Special Thanks:

The author would like to thank the following:

Ms. Kikuko Mills (ミルズ喜久子氏), Louisa May Alcott's Orchard House, Concord, MA, USA.

小畑洋一氏 (元読売新聞東京本社世論調査部記者／元社会福祉法人読売光と愛の事業団常務理事)

佐藤伸氏 (北秋田市 郷土史研究家)

高橋治氏 (高橋本吉・なを嫡孫)

参考文献

- 飯田市ホームページ <https://www.city.iida.lg.jp/site/bunkazai/kankoutei.html>
- 伊藤整 (1958) 『日本文壇史 5 詩人と革命家たち』 講談社
- 伊藤整 (1971) 『日本文壇史 9 日露戦後の新文學』 講談社
- 伊藤整 (1971) 『日本文壇史 10 新文學の群生期』 講談社
- 伊藤整 (1971) 『日本文壇史 11 自然主義の勃興期』 講談社
- 伊藤整 (1971) 『日本文壇史 12 自然主義の最盛期』 講談社
- 伊藤整 (1972) 『日本文壇史 14 反自然主義の人たち』 講談社
- 伊藤整 (1972) 『日本文壇史 15 近代劇運動の發足』 講談社
- オルコット (1904) 『小婦人』 北田秋圃、彩雲閣
- 杉潤廣 (1989) 『秋田代議士物語』 秋田魁新報社
- 小松原宏子 (2021) 「『若草物語』はなぜ『若草物語』なのか: *Little Women* の邦題を考える」
多摩大学グローバルスタディーズ紀要 第 13 号: 31-52.
- 小松原宏子 (2022) 「研究ノート: 「北田秋圃」をさがして〜 *Little Women* の初邦訳『小婦人』の翻訳者をさがす旅〜」多摩大学グローバルスタディーズ紀要 第 14 号: 57-71.
- 小松原宏子 (2023) 「研究ノート: 「北田秋圃」をさがして (2) 〜 *Little Women* の初邦訳『小婦人』の翻訳者をさがす旅〜」多摩大学グローバルスタディーズ紀要 第 15 号: 37-50.
- 谷口由美子 (2019) 『若草物語 I & II』 講談社
- 西本波太 (1906) 『小菽集』 帝国婦人協会出版部
- 溝口悦次 (1922) 『高橋本吉君追想録』 (私家版)
- 山澤俊夫 (1899) 『女学講義 2』 大日本女学会
- 読売新聞 (1994.7.6) 「若草物語を初翻訳」